

氏名: 学籍番号: No: 平成27年 10月20日

① 題名: 『リーダーシップに挑む日本の教師 ⑤』 石川 芳彦 著

② 概要: 小学5年生の算数科での授業分析記録および、授業者の授業後の反省から、授業者が「授業内で」どのような意思決定をし、子どもたちと関わっているのかを考える。

③ キーワード: 「^{の改善}教授 - 学習過程における教師の意思決定」

④ メインメッセージ: 分析対象としての授業者は、授業内における自らの意思決定によって、子どもの思考を促進し、相互作用(教師と子ども、あるいは子どもどうし)を変化させる「など」、子どもたちが「考えること」に多大の影響を与えていた。[授業分析やその後の反省などを通して、このことを明らかにすることは、教師の資質向上にもつなげるのでは?]

⑤ 内容: 「2-1. モノクドエとの研究の歩み」・「^{①子どもが考える力を}「^{るために教科書を使用せよ}」など」について

(2-1) モノクドエからの質問事項の1つに、^①教科書と言うと、授業には欠かせない「Q8 教師は生涯学び続ける人として、どう」というイメージが強いが、授業者は教科書を使ったりはしない、とあるが、教師が「^①」を使用していることで、子どもたちが多様に考え生涯学び続ける人であるということは、^① 持っているに働かされた。確かに、教科書にはよく(?)言われていることであるが、現役の「^①」や解説や載っており、一度見ると、考えを教師にその意識はあるのか、おぼろげに理解した「つもり」には「あるが、本当に思考の質問にどう答えるのか、^①」が今にふた。発達につなげては、「おぼろげに感じた」。

⑥⑤ その他: (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

・ p.102 「努力点 授業研究」とはどのような授業研究のことか。

・ p.113 「子どもの世界への言葉」とあり、その後、教師が説明するよりも、子どもが説明する方がよいと記述しているが、本当にそう断言できるのか。

⑦⑥ 理由: (なぜそう思ったのか)

2点目については、確かに、教師の説明が難しいと感じ、子どもがくだけたような説明の方がわかりやすいという状況もあるとは思いますが、逆に、子どもたちの説明が不足、あるいは難しくなり、聞く側が困らしてしまうこともあるのでは、と考えたため。

⑧⑦ 結論: 教師の説明がよいのか、子どもの説明がよいのかに関しては、その状況によると思う。教師が説明すること「考える」ため、子どもの思考の妨げらる場合であれば、逆により深い理解や思考へとつなげる場合もある。子どもが説明する場合も同様である。重要なのは、教師が「どちらに説明させるのか」適切なやり方を臨機応変に見極めることである。これは容易なことではないが、授業分析や反省会の場を通して

氏名： 学籍番号： No: 2 平成27年10月21日

① 題名： リーダーシップに挑む日本の教師

② 概要： 小学5年生に対する算数科「面積」の単元の授業。授業の場面ごとにその説明、教師の発言の解釈、教師の反省をもとにした解釈を行い、各場面ご教師がなぜそのような言動をするに至ったかを考察している。

③ キーワード： 教師の意思決定、思考、態度

④ メインメッセージ： 教師の反省をもとにした解釈の中で、「多くの子に活躍の場を与える」ために発表をさせたり、「子どもの相互関係をつくる」ために理解できていない子に理解できている子が指導するようにしたりと、まさに教師が学びの環境をデザインしている共うである。子どもの自尊心を高め、自分たちで学習をすすめられるようにしようという意識が見られ、また重要でもある。

⑤ 内容： 「質問事項」・「場面④・解釈」・「など」について

「自己更新」というワードが良い。
「変化」「成長」よりも
能動的な雰囲気がある。

筆者の観察

→ 理解できていない子どもの
ためになる方法を示して
くれるような子指名

石川教諭

→ 先回の反省を生かし、
女子を授業に参加させる
ためにT子指名

見えているものと、意図されているもののギャップが
面白い。

⑥⑤ その他： (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

Q 子ども同士で教え合う(もうが理解できるのはなぜか)

(A. 先生よりも好きやあから? 会話しやあ? 言葉が通いやすい?)

⑦⑥ 理由： (なぜそう思ったのか)

特に論理的思考力が発達段階にある小学生の子どもでは、その子の頭の中(だけ)で成り立っている論理があり、それを他の子どもに伝えられるのかというところが疑問。

⑧⑧ 結論： 教師の信念(石川教諭の場合は子ども中心のアプローチ)に従って、子どもの様子や反応を見ながら授業を展開していくことが必要である。さらに、その1回1回、1つ1つの出来事を教師自身の経験値として受け止めていくことで、次の授業につながる。

氏名：

学籍番号：

No: 2

平成 27 年 10 月 21 日

① 題名：リーダーシップに挑む 日本の教師 (2-1, 2-2)

② 概要：本文ではアラニ先生の博士論文を中心に取り上げる。テーマは、「教授—学習過程の改善における教師の意思決定の質的变化」だ。観察した授業を分節化し、それぞれの場面での教師の意思決定について、その理由やねらいや効果を分析する。石川教諭の意思決定の意図からは、研修での反省や彼の授業観とうかがうことができる。例えば彼は、教師が説明するより、子ども同士で相互関係をつくる方が理解が深まると思っているので、わかるようにわからない子へ説明せよという意思決定をする。この背景には、彼が、授業を、学び合い、異なる考えをもつ者同士認め合い場だと考えていることがある。

③ キーワード：教師の意思決定、ねらい、子ども中心のアプローチ、多様性

④ メインメッセージ：石川教諭の授業について読んで、授業の一つひとつの展開には教師のねらいをもった合理的な意思決定があることに驚いた。本文でいう「子ども中心のアプローチ」は、最近推進されているアクティブラーニングに近いと思う。99歳の学校で子ども自身に発表させたり、グループ活動を取り入れたりしていると思うが、石川教諭のように一つひとつの展開について、子どもの思考の変化まで予想し意思決定をすることは難いだろう。アクティブラーニングを導入する範囲について知っておく必要がある。子どもがどんな風に考えるか、どんな活動が有効かを知るためには授業研究は欠かせないと思った。従来の一方向的な授業とは異なり、子どもの思考力の成長は著しくなるだろうから、以前にも増して授業研究は授業改善に重要な役割を果たすようになると思う。

⑤ 内容：「ある子どもの面談を求める…」・「授業研究のまとめ」・「など」について

「ある子どもの面談を求める方法」を別の子どもに説明させる場面では、他の子の考えをどのように理解したか知るだけでなく、説明を聞いている子どもにも『自分ならこう説明する』という思考が働くところまで、意思決定のねらいが及んでいるのが驚きだ。他にも様々な場面で、多様性や異文化理解、自尊心について考案している。多様な考えが出てくるように、と石川教諭はできるだけ99歳の子どもを授業に参加させようとしているが、それは99歳の子どもたちに表現するチャンス、自己効力感を高めるチャンスを与えていることにもなると思う。算数だけでなく、他の教科でも、このような授業をできれば、子どもたちは自分の得意分野で活躍するチャンスを得られるだろう。子ども中心の学習は、生涯学び続ける態度の形成にとって重要なので、それを導入すべき適切な場面というものはあるが、できるだけ多くの教科でできればいいと思った。99歳の教師が石川教諭のような授業観や、それを実現するための技能を共有するという点でも、授業研究や勉強会という場が不可欠のだろう。

⑥⑤ その他：(自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

(授業研究のまとめ、p.123)「子ども中心のアプローチを取ることで…教師が危険と引き受けられるようになる」とはどのようなことか、ここでいう危険とは何か疑問に思った。

⑦⑥ 理由：(なぜそう思ったのか)

自分の経験からは授業中の「危険」というのが思い当たらないが、子どもが途中でつまづいて授業について来られなくなる、ということだと予想する

⑧⑦ 結論：石川教諭の授業に表れているような授業観は、彼が自ら読んだ本や、授業研究での反省をもとに彼自身の学びによって獲得されたものだと、本文から分かる。近年、アクティブラーニングの推奨などを通して授業方法がどんどん更新されているが、授業の展開が教師の意思決定に基づいているのだから、教師の授業観の更新は疎かにしてはならないと思った。

氏名:

学籍番号:

No: 2

平成27年10月15日

① 題名: 「リターンシップに挑む日本の教師」

② 概要: 本論は現職教育が教師の資質向上にいかに関与するか、ということの研究。アラニ先生による検証と、被検証者による叙述による構成されている。石川敬彌(被検証者)による平行四辺形の面積を応用して成る授業において、次の特徴が見られた。①子どもは四角形の面積を求める時に具体的な長さや高さが分からないと混乱する生徒がいる。②長さや高さをどの辺、面積の求め方を言葉で表現しなかつた。③教師の説明よりも子どもの説明の方がよむことになって分りやすいという点である。教師はこういった教授法を通して、例えば子どもの説明をせざるばかりでなく、その説明が伴った子どものような物事を考えたか、人的資源や制度的条件を調整しようとしていた。している。

③ キーワード: 見直し、反省、授業分析、現職教育、楷等法、教授技術、学びの場のデザイン

④ メインメッセージ: 他者の発表を聞く、他者の教えたということは「子ども世界で分かる言葉」があることから、有効である。他者理解が進んで進められているが、これは学校ではできない学びである。ITの進歩が著しい現代では分りやすく教えるだけならITを用いなければ。その中で学校の役割というものが問い直されており、この相互学習こそが学校にとって重要になるだろう。

⑤ 内容: 「学びの場のデザイン」・「教科書を使用せぬ」・「など」について

- ・ 本文中には P102にて「考え方が多様にもてる場をつくる」、P120にて「教師は子どもたちの子どもの要求にこたえるために人的資源や制度的条件を調整したいと考える。」と登場しており、これはアラニ先生が言う、「学びの場をデザインすることが教師の役割」と大きく関係するものである。
- ・ 石川先生は本文中の授業では教科書を使用せぬとわかった。教科書を用いると問題に対してのアプローチの仕方が一様に決まると判断したためである。このように教科書の悪い点を批判し、授業を行う先生は「教科書を使えないので早く教科書で教えるのをやめよう。」と自発的に

⑥⑤ その他: (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

・ 子どもが自由に学ぶ中で楷等法、教授技術は確実にある。

「努力点 授業研究」(P.102)とは?

⑦⑥ 理由: (なぜそう思ったのか)

・ 自由の枠組みを作るのは教師であるから。

⑧④ 結論:

・ 良い授業をするには子ども一人ひとりの特性を知るだけでなく、子ども同士の関係性も知ることがある。子ども同士の相互学習が鍵となる。そのために教師は

氏名: 学籍番号: No: 2 平成27年10月2/日

① 題名: リーディングに挑む 日本の教師

② 概要: 算数の授業を例に出し、教師の意志決定とその要因を説明することで、子どもたちの思考や態度にどのような作用したかを明らかにした。

③ キーワード: 現職教育、意志決定、子ども中心のアプローチ

④ メインメッセージ:

教科書と参考にしている授業は、どちらかと言うと自身の体験では一般的であった。今は、ただ自分で考えて説明できる力に力を入れ、他者の考えを理解し説明できる力を備えることが求められていると聞き、そのことにより授業の進め方、教師の役割も深く考える必要性があると考えた。

⑤ 内容: AFDハートからの質問事項「子どもの世界で今いる言葉」について

A 子どもに対する考え方、授業観、教師像等についての質問に対して、常に教師は答えを持つべきである。問いを通してここで成長することにつながる。

B 教師の説明が必ずしも分かりやすいわけではなく、子どもの考え、表現の仕方には目と向きると面白い。

⑥⑤ その他: (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)
筆者の言通り、右) 教諭は 校内研修前後で大きく変わったかどうかが
定かではない。「23年の教職経験があったことを考えれば、校内研修があるとならうと、自ら自己の授業と反省し、自然と改善していると思われ。」

⑦⑥ 理由: (なぜそう思ったのか)

⑧⑦ 結論:

現職教育としての「授業研究」の有効性は証明できる。
授業において教師が任ずる役割、任ずるべき事は多様にある

氏名: 学籍番号: No: 平成27年10月21日

① 題名: リーダーシップに挑む日本の教師

② 概要: 石川教諭の授業には、子供同士で教え合ったり、考えを深めるための工夫がされている。子ども中心のアプローチを取りとて、子どもが打ち解けることができ、また、子どもが成功し、自尊心を培うことができる。

③ キーワード: 子ども中心のアプローチ

④ メインメッセージ:

子どもの発言に、「今日ははじめはよくわからなかったけど、みんなのしほにやったりしたとよくわかった」とあることから、ただ教師の発言を聞くよりも、子ども同士で互いに学び合ったほうが、より理解が深まる。

⑤ 内容: 「質問事項」・「授業研究のまとめ」・「など」について

日ごろは何も考えずに、教師を続けたこともできるが、教師の精神が老化していると、教師と一緒にいることに興味を失ってしまう。教師は、新しい生き方である子どもたちと向き合い、その進むべき道を切り拓いて仕事に打ち込むこと。

石川教諭は、子どもたちが自分自身の考えを説明し、他の子どもの説明を聞く機会を多く提供している。子ども中心のアプローチ。

⑥⑤ その他: (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

子どもが教師より、他の子どもの発表のほうが理解しやすいのはなぜか。

→ 興味の持ち方が違うから?

⑦⑥ 理由: (なぜそう思ったのか)

教え方自体は、何年も同じ授業をしている教師のほうが、よほどできていて分かりやすいはずだが、教師よりも他の子どもの発表のほうが分かりやすいというのは、不思議である。

⑧④ 結論:

子ども同士で考え合ったり、教え合ったりする子ども中心のアプローチは、子どもの理解を促す上で重要である。ただし、授業の中で考えさせることは非常に時間がかかる。

これらについては、石川教諭が学んできた授業観である。

氏名:

学籍番号:

No:

2

平成27年10月20日

① 題名: リーダーシップに挑む 日本の教師

② 概要: 石川教諭の授業を分析した結果、次のことがあった。

・石川氏は授業で授業-学習過程及び解題スタイルを定めて、生徒の思考を促進することをしている。また、自分の取った仮定や創作活動の他の子供にも説明する機会を多く与え、授業で子供も主体的に学習の「場」を提供した。

③ キーワード: モハドエムからの質問事項、自己更新

④ メインメッセージ:

先生の授業研究に対する姿勢が表れている質問で、とても興味深い。
先生の質問に対して、石川氏は「教師は精神も進化することが出来る。自己更新のため精神的にも身体的にも若々しく自分のためにこれが必要」と述べている。「自己更新」という概念が面白い。

⑤ 内容: 「教科書を使用しない」・「解」・「など」について

・小学3年生のころだったと思う。先生が突然「1から10まで足すといつてあるが」という疑問をたえた。教科書には書かれていない疑問だった。この問題の解をたえた僕は1日時間を考えつづけた。そして、何回も数字や数字を採らなかが、答をたどりつくことができた。他の疑問はいまでも記憶に残っている。「考えること」を研究する良い疑問だと思う。

⑥⑤ その他: (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

「子供の世界ごとの話」で、とても重要な概念だと思う。

⑦⑥ 理由: (なぜそう思ったのか)

人の話や言葉は、同じ日本語でも、1人1人違う。言葉には、その人の人格や価値観がある。したがって、その人の言葉を理解しようと思えば、

⑧③ 結論: その人に寄り添って耳を傾ける必要がある。

人の話を聴くことはとても難しいが、自分の言葉で理解するのではなく、相手の言葉に寄り添って耳を傾けることは必要だ。